2. 事業の概要と成果

(1)上位目標の達成度

本事業の上位目標は、「農村に住む全ての子供たちの義務教育の修了」である。本事業は目的達成のための第2年次の事業である。本事業の達成度の評価には長期的な観察を有する。

2015年度の第一次事業においては、1小学校と1中学校を建設した。 両校では建設年次後の生徒数がニャマコロブグー小学校では、一年生50 人が入学した。シンザニ中学校では、40人が増加した。詳細は、(3)達成された成果を参照してください。

2016年度の事業においては本事業目的である、モバ小学校、コニナ小学校、ドンギネ小学校、ゲンドウ小学校4校の建設は予定通りに完成し、これら周辺の村の子供たちに対する義務教育の一部の土台ができた。 2017年10月に始まる新学期への就学状況を注目する必要があるが、

2017年10月に始まる新学期への就学状況を注目する必要があるが、 本事業の目的は達成された。

(2) 事業内容

・小学校建設の告示の為に2016年3月に、日本人プロジェクトマネージャーがトウグニコミュン長を訪問して、トウグニコミュンに日本政府資金によるコニナ小学校、モバ小学校、ゲンドウ小学校、ドンギネ小学校をそれぞれの村で建設を行うことを説明した。

・本事業対象村の4村へ出向き、村長はじめ、長老や婦人会メンバー若者のグループが参加する村民会議にて新事業の発表と説明を行った。

新規4村への小学校建設について、小学校建設の目的、建費用は日本政府からの支援であること、各村側の責任と協力、各村の小学校自主管理委員会の開設とその業務、その他の関連事項について説明を行い、納得を得た。

- ・建設業者、学校備品の製作所、輸送者、監査会社との契約と説明。 これによって事業が具体的に開始した。
- ・建設資材の輸送を雨季前にすべて終了するように手配した。

しかし、コニナ小学校への資材の輸送が、雨季になり一部の道路が決壊し たのでトラックの入村が困難になり、多少の遅れがあった。

・コニナ小学校、モバ小学校、ドンギネ小学校、ゲンドウ小学校の建設は 予定通りに進み、2017年2月には建設を完全に終了した。

2017年2月26日に4校同日に落成式を行った。

- ・全ての学校には、既に完成していた学校内備品として、学童用の椅子連結型学習机、教師用机・椅子、教材保存庫を予定通りにバマコ輸送業者により、バマコ市の製作所からそれぞれの学校へ運ばれた。
- ・各村の自主管理委員会、父兄会は積極的に学校管理に当たっている。村の自主管理委員会では、校内の清掃や新入生のリクルートを積極的に実施 している。
- ・本事業は、ドウンバコミュン内の村に建設されたので、落成式での鍵の 引き渡しは2015年2月26日に4校すべてにおいて次の手順で実施 した。この時点で落成式となった。

ダマンギリエ務店 → 当会へ

当 会 → トウグニコミュン長へ

トウグニコミュン長 → 各村の村長へ

村 長 → 小学校の校長へ鍵を引き渡した。

・落成式の時には次のような感謝の言葉等が述べられた。

コミュン長(村長):

日本政府外務省とカラに対して非常に感謝しております。

わが国は義務教育であり、子供を学校に行かせたくても学校が不足しています。また、村の発展の為に教育は必要ですが、十分に学ぶことが出来ない状況であります。日本政府はこれを救ってくれました、心から感謝します。

村長:

我々の子供の頃にはイスラム教の経典を暗記するのが学習であった。だから文字も書けないし読むことも出来ない、計算も出来ない。しかし今は違っている、子供たちは多くのことを学ばなければいけない。子供たちが学ぶこのような立派な学校を建設してくれて、非常に感謝している。教室、学校の管理や清掃もしっかり実行することを述べた。

学校自主管理委員会代表:

委員会代表も同様に感謝の言葉を述べ、新学期には少しでも多くの子供たちを就学させるよう努力する。

机や教室内もしっかり管理することを述べていた。

村の女性委員会代表:

子供たちにとってこのような綺麗な学校が出来て本当に満足している、感謝に堪えない。女児を安心して学校へ送ることが出来る、と喜びと共に感謝の言葉を述べていた。

小学校の校長:

マリ政府に長いこと申請をしていたが、未だ許可されていなかった村の 小学校の建設が日本政府の支援で立派な学校が建設されました。

ゲンドウ小学校やドンギネ小学校は、今までは土レンガで村の男性が建設した学校であり、雨季の風雨にさらされて崩壊寸前で非常に危険な状態であったが、今回新しいい学校に十分に机や椅子が揃った。そして就学希望児童を全員許可することが出来るようになり、授業時間も十分になった等、これからは多くの点が改善されます。コニナ小学校やモバ小学校では、生徒数が増えたので3教室を建設してもらい6教室揃いました。

これら、小学校の建設は就学児童、特に女児が自宅からの通学が容易になり生徒数が更に増えると思います。

また、1年生や2年生にとって自宅から学校が近いので非常に便利になりました。と感謝が述べられた。

教師たち:

|授業を順調に進めることが出来るようになった。

教師たちの机や椅子も完備され非常に都合よくなりました。

また重要な書類も完全に保存できます、感謝も言葉が述べられた。

この式典には他の村からも多くの長老が招待されて参加していた。 人々からは、口々に「アリガトウ、ありがとう」と言い、母親たちは特に 女の子に教育が出来ることに大喜びであった。

カラからは次のことを注意した。

- ・これらの学校はトウグニ コミュンに移管したので、管理の責任はコミュン長である。
- ・新しい学校の建設でカラの責任は終了した、この小学校から多くの生徒が中学へ進学し、村の発達に貢献する青年を誕生させてほしい。この後は、コミュンや村の人たちの努力が必要である。
- ・今後は生徒の机、教師の備品等を丁寧に使用すること。もし破壊しても カラは補充しない。自主管理委員会で相談して対処するように。
- ・学校内の全ての備品を自主管理委員会と父母の会が管理する。
- 常に清掃を行うように。

2月26日の落成式の日にはクリコロ町から地方ラジオ局がコニナ村に 来て生徒たちにインタヴューをしていた。

その他、2016年事業では、本事業の第一年次事業である2015年度 建設のドウンバコミュン内の2校(ニャマコロブグー小学校、及びシンザ ニ中学校)の2016年10月の就学状況の調査を行った。

また、毎月この2校の管理状況の調査を行い結果を日本本部に報告している。

(3) 達成された成果

本事業は2015年度からの2年にわたる事業である。

第一年次の事業による本年までの達成状況は次のようである。

2015年度の事業においては、1小学校と1中学校を建設した。両校の 建設終了後の就学状況は次のようであった。

ニャマコロブグー小学校生徒数の動向:

建設前の全生徒数

80人(男児46人 女児34人)

建設後(2016年10月)全生徒数 130人(男児71人 女児59人)

※新入学生徒数(一年生)50人

シンザニ中学校生徒数の動向:

建設前の全生徒数

23人(男児16人 女児 7人)

建設後(2016年10月)全生徒数 63人(男児37人 女児26人)

※ドウンバ中学校から転校生数15人, 新入学生徒数(一年生)25人 新入学生徒数(一年生)25人。

上記のように確実に生徒数は増えている。ただしマリ共和国は教育制度が 義務教育ではあるが、学校へ就学させる家庭は学校に毎月月謝を支払う義 務があるので、それに対応できない家庭では子供を就学させることが出来ないのも現実である。

第二年次である2016年度の事業においては

・マリ共和国の小学校は、新学期が10月の為に2017年の新規の入学者数は現在は不明であるが、村内に堅固な小学校が完備され、寒さや、風雨をしのげる教室で学習できること、近距離に学校が存在する事など、多くの理由で安心して子供を就学させることが出来るなど、子供の就学を希望する両親の意向が高くなっている。

2017年3月現在の在校生は次に記すようであるが、10月にはこの数値を上回る状況になると考える。

コ ニ ナ 小学校:286名(女児142 男児124) モ バ 小学校:185名(女児120 男児 65) ドンギネ小学校:127名(女児 67男児 60) ゲンドウ小学校:83名(女児 47 男児 36)

(4) 持続可能性

地域住民は、教育が地域開発の基本であることを理解しているので、新学 校の開設は現在の教育に対する意識よりも更に高まると考えられる。

現実的には、ギニア国境辺で金の掘削が行われているので男性はそこへ出 稼ぎ者が非常に多いが、女性は雨期の農繁期で多忙であっても夜間には識 字教室を開催して熱心に学び、出席数も増加している。

この一因は、当会が保健部門の事業で、文字を書ける女性、就学経験のある女性を助産師に育成し建設した産院で働くチャンスを得ているために、 将来において女性も教育を受ければ職業を身につけることが出来るという意識が人々の間で生まれ、特に女性への教育熱が非常に高まって来たことによる。

教育に対する男女間の格差がこの地域では、少なくなってきたと考えられる。現に前述の表によっても女児の就学数が男児を上回っている。

本事業の対象となったトウグニ コミュンには、まだ多くの村には学校がない。マリ共和国政府が小学校・中学校へ9年間の義務教育制度をとっても現実はそれに及ばず、この地域では中学校は、27ヶ村中に2校だけである。今後は中学校の開設を望まれることは確実である。

よってこの教育に関する事業は、これまで村によっては学校教育に対する 偏見が強く、子供の就学を避けて来た人たちが多かった。しかし、今後は この意識が大きく改善されるようになり、持続可能性は高いと考える。